

## 研 究

慢性疾患を抱える子どもが保育所生活に  
馴染むための保育所看護職の関わり

中山 静 和

## 〔論文要旨〕

慢性疾患を抱える子どもが保育所生活に馴染んでいくための保育所看護職の関わりの有り様について明らかにすることを目的とし、保育所に勤務する看護職21名を対象に半構成的面接を実施した。結果から、【子どもが置かれている状況を読み取る】、【子どもと周囲の状況を整える】、【気付きの目がある普段の環境をつくる】の3つの主要カテゴリーが抽出された。保育所看護職の関わりは、慢性疾患を抱える子どもと周囲に働きかけ、子どもが受け入れられやすい安全な環境をつくるプロセスとして明らかになった。今後は、保育所看護職が慢性疾患を抱える子どもと親を支援するための現任教育プログラムの検討が必要である。

Key words : 保育所看護職, 慢性疾患, 子ども, 保育所生活

## I. はじめに

近年、医療技術の向上と衛生環境の改善に伴い、多くの慢性疾患は生命の危機が回避されるようになり、一般の保育所にも慢性に経過する疾患を抱える子どもたちが多くみられるようになってきている<sup>1,2)</sup>。慢性疾患を抱える子ども（以下、子ども）が保育所生活を送るうえで受ける心理社会的発達への影響として、食事や活動に制限があることを、保育所でも過す周りの子ども（以下、周りの子ども）に受け入れられない、かゆみ等で集中力が切れて思う存分したいことができない、体調が優れず欠席が多くなることによって周りの子どもとの関係を築きにくいことなどが指摘されている<sup>3)</sup>。また、保育士による子どもの疾患・症状への対処の実施率は5割程度に留まっており、保育士は、子どもが集団生活も周りの子どもと一緒に過ごせるような個別的なケアや対応を保育所看護師に望んでいることが報告されている<sup>4)</sup>。しかし、子どもに対する保育所看護職の関わりについてはほとんど明らかにされ

ていない。

保育所看護職が、子どもに対し、どのように関わっているかを明らかにすることは、現任の保育所看護職による子どものニーズに対する支援の強化と、子どもが健康を維持しながら保育所生活を送ることへの保障に繋がると考えた。そこで、子どもが体調の不安定さ等により保育所生活に入りにくい状況が繰り返されていることを「子どもが保育所生活に馴染めていない状況」と捉え、子どもが保育所生活に馴染んでいくための保育所看護職の関わりに焦点をあて、研究を行った。

## II. 研究目的

本研究は、子どもが保育所生活に馴染んでいくための保育所看護職の関わりの有り様を明らかにし、保育所看護職の子どもへの保健活動の強化に向けた示唆を得ることを目的とした。

## III. 用語の定義

「子ども」とは、医師によりなんらかの慢性疾患の

診断を受け、慢性的な状態にあり、疾患に関連する医療的側面から特別な観察や配慮、環境調整、ケアなどを要する子どもとした。本研究において、自閉症スペクトラム障害などの発達障害を抱える子どもについては、直接的な医療的ケアの必要性は高くないとして対象から除いた。

「馴染んでいく」とは、子どもが、健康を維持させながら体調に支障がない範囲で保育活動に参加し、周りの子どもや保育所職員との関わりを通じて保育所生活に慣れ親しんでいくこととした。

#### IV. 研究方法

##### 1. 研究参加者

研究参加者は、公立または私立の認可保育所に勤務している看護職で、保健業務を遂行し、子どもに継続して1年以上関わった経験があり、所属する施設の管理者の了承および研究協力に関して文書による同意が得られている者とした。

##### 2. データ収集方法

保育保健関連の協議会および公的機関の担当部署から対象施設の紹介を受けた。研究参加候補者の所属する施設管理者へ電話にて連絡し、研究目的および主旨説明を行った。施設管理者から研究協力への承諾が得られた施設の研究参加候補者および施設管理者宛てに、研究協力依頼の書類を郵送した。後日、研究参加候補者へ電話にて研究協力の意思の有無を尋ね、研究協力の承諾が得られた研究参加者の都合に合わせてインタビューの日時と場所を決定した。面接開始前に再度研究について説明を行い、同意を得たのちにインタビューを開始した。先行研究をもとに研究者が作成したインタビューガイドを用い、保育所内もしくは研究参加者の指定した場所において1対1の半構成的面接を1人1回、約60分程度実施した。半構成的面接でのインタビュー内容は、研究参加者の保育所看護職の勤務経験年数、所属の保育所で関わった子どもの人数、子どもに対してどのような関わりをしたか、子どもが保育所生活に馴染んだと感じたのはいつ頃か、どのようなことから子どもが馴染んだと感じたか、子どもが周りの子どもや保育士と関わる中で特に配慮したことやその時に感じたこと、子どもの保護者にどのような関わりをしているか、子どもが保育所生活に馴染んでいないと感じた場面はあったか、どのようなことから

子どもが馴染んでいないと感じたか、子どもへの関わりにおいて困っていることや悩むこととその要因と感ずることについてとし、研究参加者に自由に語ってもらった。また、インタビュー内容は、研究参加者の承諾を得て録音やメモを取った。

##### 3. データ収集期間

2014年1月下旬～8月下旬。

##### 4. 分析方法

グラウンデッド・セオリー・アプローチによる継続的比較分析を行った。

語りや録音した内容を逐語録に起こし、その内容から、保育所看護職が子どもへの関わりとその意味のある部分を抽出しコード化を行った。また、データを比較検討しながら類似した意味を持つコードをカテゴリー化し、それらの間にある関係およびコードやカテゴリーに影響をしている要因について検討を行った。また、小児看護学の専門家である指導教官より指導を受け、本研究のデータの信憑性の確保に努めた。

##### 5. 倫理的配慮

研究参加への同意を得られた研究参加者に対し、研究目的、調査方法、研究参加は自由意思であること、研究途中でも中断が可能であり断ることによる不利益を受けないこと、個人情報保護と厳重なデータ管理、研究成果を学会や学術雑誌等で発表することについて書面および口頭にて説明し、同意を得た。なお、本研究は聖路加国際大学（元 聖路加看護大学）研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号13-067）。

#### V. 結果

##### 1. 研究参加者の背景

研究参加者は、1都2県の保育所に勤務する看護職21名（公立16ヶ所、私立5ヶ所）で、全員女性であった。保育所看護職の経験年数は、平均17.7年（4～32年）であった。研究参加者が関わった子どもの疾患は、アトピー性皮膚炎や気管支喘息などアレルギー疾患が最も多く、その他では二分脊椎症やてんかんなど多岐にわたっていた。インタビューは、1人1回、平均60分（51～86分）であった。分析の結果、子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わりは、3つの主要カテゴリー、8つのカテゴリー、18のサブカテゴリー

表 カテゴリー一覧

主要カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子どもが置かれている状況を読み取る	子どもの置かれている生活状況を読み取る	症状の存在と変化を気に掛ける
		疾患によって置かれている生活状況を読み取る
子どもと周囲の状況を整える	体調を整える	症状が現れないように気をつける
		辛い症状を取る
	子どもの力を引き出す	子どもの思いを汲む
		自分の体に関心を向けられるように関わる
	小さな関わりで親を動かす	親の様子に合わせて少し働きかける
		親との繋がりを強くする
自然に受け入れられるようにする	どういう説明をしようかと心構えを持つ	
	子どもの思いを代弁する	
保育士の関わりを見守る	子どものタイミングに合わせて働きかける	
	保育士の戸惑いを取り払う	
	保育士による周りの子どもへの関わりを見守る	
気付きの目がある普段の環境をつくる	みんなと一緒に過ごせる環境を整える	保育士による親への関わりを見守る
		みんなと一緒に過ごせるように関わる
	子どもの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる	周りの子どもとの関わりの中でそのままを受け入れられる
		普段の保育に医療的な部分を添える
		子どもの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる

リーが抽出された(表)。以下、主要カテゴリーを【 】, カテゴリーを《 》, サブカテゴリーを< >, 研究参加者の語りは「斜字」, 子どもの言葉を『 』で示す。

## 2. 子どもが保育所生活に馴染んでいくための保育所看護職の関わりを構成するカテゴリー

### 1) 【子どもが置かれている状況を読み取る】

【子どもが置かれている状況を読み取る】は、保育所看護職が、子どもが示す僅かな症状や体調の変化に目を向け、医療的な情報を得ることにより、疾患による保育所生活上の影響について読み取ろうとしていることを意味する。カテゴリーは、《子どもの置かれている生活状況を読み取る》の1つで構成されていた。保育所看護職は、「発作を起こした時におしっこを漏らしちゃった」と、子どもがさまざまな活動場面で見せる<症状の存在と変化を気に掛ける>ようにしていた。さらに、「親御さんにこちらの聞きたいことを書いたメモを渡して先生に聞いてきてもらおう」等の方法で<疾患によって置かれている生活状況を読み取る>ための観察をし、主治医の指示を確認しながら《子どもが置かれている状況を読み取る》努力をしていた。

### 2) 【子どもと周囲の状況を整える】

【子どもと周囲の状況を整える】は、保育所看護職が、子どもだけでなく親や周りの子ども、保育士に対して働きかけることで、子どもが保育所生活に馴染んでい

くための周囲の状況を整えることを意味する。カテゴリーは、《体調を整える》,《子どもの力を引き出す》,《小さな関わりで親を動かす》,《自然に受け入れられるようにする》,《保育士の関わりを見守る》の5つで構成されていた。

保育所看護職は、「食物アレルギーの子だとトレイの色を分ける」といった保育所での予防策や、「お父さんだったんですけど、(自作の)マニュアルを作ってきて」と、親の希望する対応策を実施することで<症状が現れないように気をつける>ことと、「(アトピー性皮膚炎の子どもに対して)外遊びをしたら、この子だけシャワー浴びせて(中略)、ステロイドを塗ります」と、慢性疾患に伴う<辛い症状を取る>ことから《体調を整える》ことに繋ぎ、子ども自身の状況を整えていた。

また、保育所看護職は、「(4歳の食物アレルギーの子どもが)その子だけご飯で、『いつパンが食べられるの?』っていうようなことを言ってきて」と、子どもの表現した思いを受け取り、「我慢できて偉いね」と子どもを励ましながらか<子どもの思いを汲む>ようにしていた。それにより、子どもが持つ「自分に必要なことを受け入れて継続できる」力に働きかけ、《子どもの力を引き出す》ことから、子どもが自分の力で《体調を整える》ことに繋ぎ、子ども自身の状況を整えていた。さらに保育所看護職は、6歳の子どもの対し、「自分から少し協力できるように」と、子どもの自主的

なケアの実践場面への見守りや声かけにより、〈自分の体に関心を向けられるように関わる〉ようにしていた。それにより、子どもが持つ「自分の体の変化に気づいて自分に必要なケアを実践し、必要時には助けを求められる」力に働きかけ、《子どもの力を引き出す》ことから、子どもが自分の力で《体調を整える》ことに繋ぎ、子ども自身の状況を整えていた。

また、保育所看護職は、なかなか受診行動を起こさない親について、「(子どもの状況に)無関心」、「(親の)気持ちを動かすことが難しい」、「知識不足」と、対応に困難さや葛藤を抱いていた。一方で、「お母さんの気持ちを汲み取って」、「(子どもの)現状だけ伝えるようにして。(中略)私の説明が医師の所見と違っていると信頼関係が崩れますから」と語り、親との信頼関係の構築を大切にしたいと考えていた。保育所看護職は、このような親に対し、「偶然を装って声を掛ける」、「大変だね」と共感的な姿勢を示す、「子どもの症状をお知らせとして伝える」、「お願いするような伝え方」、「(親が子どもにケアをしたことを)ほめながら」と関わり方を工夫して、〈親の様子に合わせて少し働きかける〉ことを繰り返すといった《小さな関わりで親を動かす》努力をしていた。それにより、子どもの周囲の状況としての「親」を整え、親の受診行動やケア実践を促し、子どもの《体調を整える》ことに繋げていた。さらに、保育所看護職は、積極的に医療に繋がろうとする親に対し、「医療的な側面をちょっと押して」と、医療的知識を持つ看護職としての強みを活かした関わりや、「親の思いを汲む」、「その子にとっていい方法を(親と)一緒に話し合う」と、親との連携に向けた関わりにより〈親との繋がりを強くする〉ことを大切にしていた。保育所看護職は、このような《小さな関わりで親を動かす》ようにし、子どもの周囲の状況としての「親」を整え、子どもの《体調を整える》ことに繋げていた。

また、保育所看護職は、子どもの身体状況やケア場面对して周りの子どもが示した興味や関心に対し、「ちょっと覚悟はしていましたね。『気持ち悪い』とか言われたら」と、〈どういふ説明をしようかと心構えを持つ〉ことで、子どもが周りの子どもから特別視されず、疎外感を感じないための関わりについて考えていた。さらに、保育所看護職は、「その子の気持ちを代弁したり」と、〈子どもの思いを代弁する〉ことや、「その子のタイミングで」と、周りの子どもが子どもの状況に関心を向けた時などの〈子どものタイミングに合

わせて働きかける〉ことで、子どもが周りの子どもから《自然に受け入れられるようにする》関わりをしていた。それにより、子どもの周囲の状況としての「周りの子ども」を整え、普段の保育所生活の中で子どもが特別な配慮やケアを受けやすくし、子どもの《体調を整える》ことに繋げていた。

また、保育所看護職は、「落ち着いて関わられるように」と、子どもへの保育に対する〈保育士の戸惑いを取り払う〉ように関わりながら、「担任はタイミングを見て(子どもの状況を)クラスの子どものに話します」と、〈保育士による周りの子どもへの関わりを見守る〉ようにしていた。さらに、保育所看護職は、「看護職でなくてもいい」、「いつも私がそこ(ケア場面)にいられるわけではないので。必要があれば呼ばれて。(中略)(ケアは)担任がお母さんとやっていました」と、子どもに対し、保育所看護職が常に直接ケアができるとは限らない保育現場の現状を考慮し、子どもがタイムリーにケアを受けられることを重視しながら〈保育士による親への関わりを見守る〉ようにしていた。このように、保育所看護職は、保育士の気持ちが落ち着くための関わりで子どもの周囲の状況としての「保育士」を整え、担任としての子ども・親・周りの子どもへの《保育士の関わりを見守る》ことで、子どもの《体調を整える》ことに繋げていた。

### 3) 【気付きの目がある普段の環境をつくる】

【気付きの目がある普段の環境をつくる】は、保育所看護職とともに医療的な面も含めた体調の変化に気が付くことのできる保育士のいる保育環境をつくることを意味する。カテゴリーは、《みんなと一緒に過ごせる環境を整える》、《子どもの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる》の2つで構成されていた。

保育所看護職は、「できることは周りの子と同じにして」と、子どもの身体状況に応じて保育活動を考慮し、可能な限り〈みんなと一緒に過ごせるように関わる〉ことを大切にしていた。さらに、保育所看護職は、「保育所は、小さいころから同じクラスで(中略)(周りの子どもは、子どもの状況を)ありのまま受け入れている(中略)、それって、子どもの持っている力」と、〈周りの子どもとの関わりの中でそのままを受け入れられる〉ことが馴染んでいくことに繋がると捉え、周りの子どもが持つ「状況を受け入れる力」も感じながら、子どもが《みんなと一緒に過ごせる環境を整える》ようにしていた。

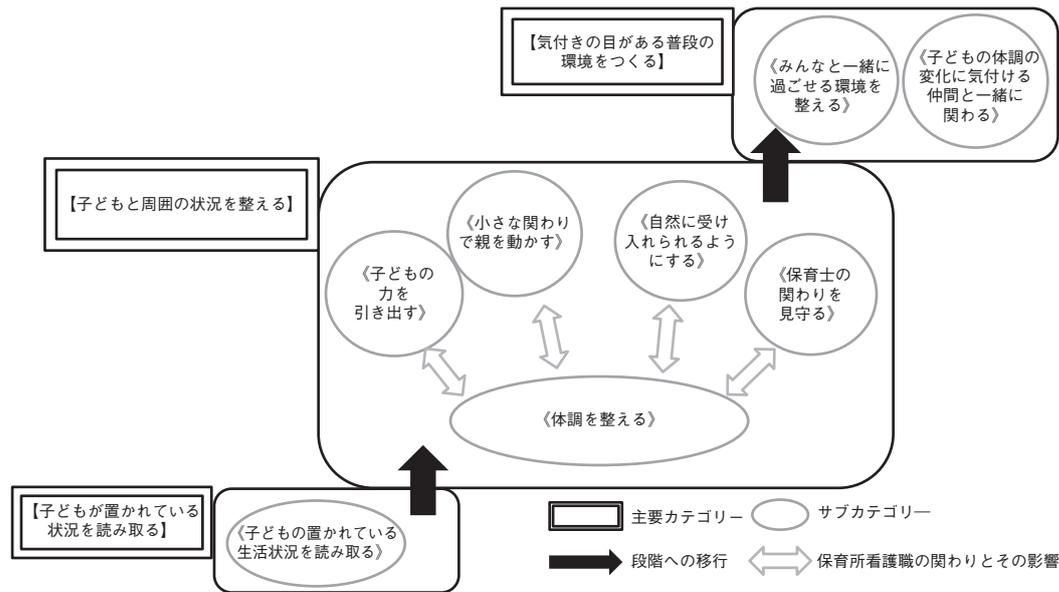


図 慢性疾患を抱える子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わり

また、保育所看護職は、保育士に対し、「医学的な知識とわかりやすく伝えて。(中略)保育士さんが実践できるように」と、＜普段の保育に医療的な部分を添える＞ことに加え、「わかってくると、保育士さんも早期発見できる」と、保育士という《子どもの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる》ことで、子どもにとって安全な【気付きの目がある普段の環境をつくる】ようにしていた。一方で、「看護学校では、保育所の保健については習わなかった」、「(保育所と)病院との違いについて習っていたら、子どもへの健康支援も違ったかもしれない」と語り、保育所看護職としての学びの場を求めている。

### 3. 子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わりの構造 (図)

子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わりの構造は、子どもと子どもの周囲の状況に働きかけて子どもの体調を整えながら、子どもが受け入れられやすい安全な環境をつくるプロセスとして明らかになった。このプロセスは、【子どもが置かれている状況を読み取る】、【子どもと周囲の状況を整える】、【気付きの目がある普段の環境をつくる】の3段階で構成されていた。

保育所看護職は、子どもが疾患に伴う症状を示す様子を捉える【子どもが置かれている状況を読み取る】段階から始めていた。慢性疾患の特性上、子どもの体調は悪化と改善を繰り返すため、子どもは保育所生活

が継続しにくい傾向がある。保育所看護職は、自己の目で観察するだけでなく、担任の保育士や親から情報を得るなどの努力をし、疾患や治療状況、保育所生活での様子といった子どもの状況を理解しようとしていた。

次に、子どもの状況を理解した保育所看護職は、【子どもと周囲の状況を整える】段階へ移行していた。この段階で保育所看護職は、子どもが保育所生活に馴染むために、子どもの《体調を整える》ことを基盤として関わりながら、子ども自身・親・周りの子ども・担任の保育士という4側面にも働きかけていた。保育所看護職の《子どもの力を引き出す》関わりにより、「子ども」自身の状況を整えていた。保育所看護職により子ども自身の思いや自主性に働きかけることが、「子どもの力の発揮」が《体調を整える》ことに影響していた。さらに、保育所看護職による親への関わり方の工夫や親との信頼関係を築く努力といった《小さな関わりで親を動かす》関わりが、「親」を整えていた。それにより、親が動いて医療に繋がることで、子どもの《体調を整える》ことに影響し、子どもが継続的に通所できる状況をつくることで馴染んでいく機会を増やしていた。

また、保育所看護職の《自然に受け入れられるようにする》関わりが、「周りの子ども」を整えていた。保育所看護職による子どものタイミングでの《自然に受け入れられるようにする》関わりは、周りの子どもに協力が得られる状況をつくり出していた。そこから

つくり出された「子どもが必要なケアや配慮をスムーズに受けられる状況」が《体調を整える》ことに影響していた。さらに、「周りの子どもから特別視や疎外されることなく、馴染みやすい状況」もつくり出していた。

また、保育所看護職の《保育士の関わりを見守る》関わりが、「保育士」を整えていた。この見守りには、保育士が戸惑うことなく子どもに関わる様子への見守りと、保育士の担任としての子ども・親・周りの子どもに対する関わりへの見守りといった2つがあった。保育所看護職が、保育士の持つ担任として親や周りの子どもに働きかける役割を支えることは、「保育士との信頼関係による親の受診行動」や、「保育士による子どもが受け入れやすいクラス環境の調整」を促すことに繋がり、それが《体調を整える》ことに影響していた。さらに、このような担任の関わりからも、「子どもが特別視や疎外されることなく馴染みやすい状況」をつくり出していた。

そして、子どもと子どもの周囲の状況を整えた保育所看護職は、【気付きの目がある普段の環境をつくる】段階へ移行していた。この段階では、子どもが《みんなと一緒に過ごせる環境を整える》ことで、子どもが周りの子どもと一緒に過ごすことを増やしていた。さらに、保育士に働きかけて医療的な側面を強化することにより、保育士という《子どもの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる》ことで、子どもの安全を守りながら、子どもが保育所生活に馴染めるようにしていた。

## VI. 考 察

### 1. 子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わり

保育所看護職は、子どもの症状の出方やそれによって影響を受けやすい保育場面を捉えて繰り返し観察をし、【子どもが置かれている状況を読み取る】段階から開始していた。子どもの集団生活における保育所看護職の対応や配慮として健康状態の観察がある<sup>5)</sup>。保育所看護職は、保育所内で起こり得る子どもの体調の変化や観察ポイントを早い段階でつかむことにより、疾患による生活への影響を速やかに捉えることに繋げていたと考える。

次に、保育所看護職の関わりは、【子どもと周囲の状況を整える】段階に移り、医学的知識をもとに子

どもの辛い症状を取り除いていた。保育所看護職の子どもへの対応や配慮として、症状出現の予防や疾患・症状への対処・与薬がある<sup>5)</sup>。保育所看護職は、子どもの体調を可能な限り保育所生活に参加できる状況に整えることが馴染んでいくことに繋がると捉え《体調を整える》ことから動いていたと考える。

また、保育所看護職は、子どもが周りの子どもと同じものを食べられないことに辛さを感じている場面で、子どもの気持ちを汲み取り、励ましながら、子どもに寄り添っていた。慢性疾患をもつ幼児は、健康な子どもよりも大人からの励ましを多く必要としていることが指摘されている<sup>6)</sup>。また、子どもの持つ力を引き出す方法として、子どもの意思・意欲を大切に、子どもの自尊心を高めることが示されている<sup>7)</sup>。保育所看護職は、子どもが辛い気持ちを表現した場面を捉え、子どもの思いを汲みながら、「偉いね」と励ます姿勢を示すことで、子どもの自尊心を高め、《子どもの力を引き出す》ようにし、自分に必要なことを継続しようとする子どもの姿に寄り添うことで、引き出された子どもの力が発揮できるように関わっていたと考える。さらに、保育所看護職は、幼児後期の子どもが示す自発的な言動に対し、見守る関わりをしていた。幼児後期は自主性の獲得が発達課題であり、看護師による幼児期の子どもへの療養行動指導内容は、身体の異変に気付く・危険が回避できる・自己の医療的ケアに関心を持ち参加し始める等が中心とされている<sup>8,9)</sup>。保育所看護職は、保育所生活での子どもの自主的な療養行動や医療的ケアへの参加場面に対し、見守りや声かけという関わりで、その過程への支援とともに子どもの発達課題への取り組みを促すことから《子どもの力を引き出す》ようにしていたと考える。

また、保育所看護職は、《小さな関わりで親を動かす》努力をしていた。保育所看護職が認識している役割として、子育て支援の視点を持った親への支援の役割がある<sup>10)</sup>。保育所看護職は、親への関わり方の工夫という小さな関わりにより、親の子育てや健康管理者としての役割を後押しすることで親の受診行動を促し、そこから子どもの健康維持と継続的な通所を可能にし、子どもが保育所生活に馴染む機会を増やす努力をしていたと考える。一方で、保育所看護職の関わりに反応を示さない親については、「無関心」、「気持ちを動かすことが難しい」、「知識不足」という言葉が多く使われ、親への関わりに奮闘している姿が明らかとなった。保

育所看護職が認識している保育所保健活動における困難感として、親との良好な関係をつくることの難しさや、親の子どもに対する健康や安全への知識不足が報告されている<sup>11)</sup>。子どもが保育所生活に馴染んでいくためには、親の健康管理者としての力を発揮できることを目指した保育所看護職の関わり方の検討が必要であると考える。

また、保育所看護職は、子どもが周りの子どもから《自然に受け入れられやすいようにする》関わりをしていた。保育所看護職の関わりとして、子どもの状況に対して周りの子どもが疑問を持つような場合に、納得できるよう説明することは、子どもと周りの子どもの関係を保つうえで重要であるとされる<sup>5)</sup>。保育所看護職は、子どもと周りの子どもの関係性を重視し、「心構え」、「代弁する」、「その子のタイミング」の3つの要素を用いて周りの子どもの疑問にタイムリーに答えることで、周りの子どもが子どもの状況を受け入れることに繋げ、そこから子どもが疎外されることなくスムーズにケアや配慮が受けやすくなる状況をつくっていたと考える。

また、保育所看護職は《保育士の関わりを見守る》ようにしていた。保育所看護職が認識している役割として、保育士との連携・協働がある<sup>10)</sup>。この語りの中で多く使われていた言葉は、「看護職でなくてもいい」であった。保育所看護職は、子どもが普段の保育環境の中で安心して必要なケアや配慮が受けられることを重視し、子どもと親にとって最も身近で信頼できる存在である保育士の担任としての関わりを見守りの形で関わることで、保育士との協働を図り、保育所看護職と保育士という2職種の方から馴染んでいくことを促していたと考える。

そして、保育所看護職の関わりは【気付きの目がある普段の環境をつくる】段階に至っていた。保育所看護職の語りの中で多く使われていた言葉は、「(周りの)子どもの持つ力」であった。幼児後期は、同年代の仲間や成人から積極的に学び、周りの子どもとの生活・交流により社会性が培われる時期である<sup>7,8)</sup>。保育所看護職は、周りの子どもが持つ「状況を受け入れる力」が子どもが保育所生活に馴染んでいくことに必要な要素と捉え、子どもが周りの子どもと一緒に環境で過ごせることを大切にしながら、子どもの発達課題への取り組みを促していたと考える。

また、保育所看護職は、担任の保育士という《子ど

もの体調の変化に気付ける仲間と一緒に関わる》状況をつくっていた。保育所での保健活動において子どもの健康状態の観察や疾病への対応が強化したことは、子どもの体調不良が重症になる前に気づき、早期に対応できている状況と言える<sup>12)</sup>。保育所看護職は、子どもの変化に気付ける保育士という仲間と協働体制をつくることで、子どもの体調の変化に対して早期に対応できる安全な《気づきの目のある普段の環境をつくる》ようにしていたと考える。

## 2. 子どもへの保健活動の質の向上に向けた保育所看護職の教育の必要性

本研究では、複数名が小児看護の臨床経験のない保育所看護職であった。このような保育所看護職は、日々の保健活動に迷いが生じることも多く、保健活動についての学びの場を強く求めていた。保育所看護職の専門性を高める課題として、保育所における乳幼児への健康支援の在り方をカリキュラムに位置付ける必要性が指摘されている<sup>11,13)</sup>。今後も増加すると考えられるさまざまな子どもの入所を受け入れ、子どもが保育所生活に馴染んでいくことを支えていくために、保育所看護職による子どもへの健康支援・親への子育て支援の強化が課題である。今後は、小児看護の臨床経験の有無にかかわらず、保育所看護職が自信を持って保健活動に取り組めるよう、保育所看護職間の連携促進や保健活動・救急対応の支援教育、小児科外来等での研修に加え、家族心理学や保育学等の関連領域を含めた教育プログラムを検討する必要がある。

## VII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、研究参加者の所属する保育所の設置主体が公立保育所に偏っていること、保育所看護職の具体的な臨床経験は加味していないことにより、一般化には限界がある。今後は調査対象を増やし、保育所の設置主体と看護職の配置状況や、看護職の臨床経験と保育所での経験年数などによる比較検討が必要である。

## VIII. 結 論

子どもが保育所生活に馴染むための保育所看護職の関わりは、【子どもが置かれている状況を読み取る】、【子どもと周囲の状況を整える】、【気付きの目がある普段の環境をつくる】の3段階で構成されており、子どもの体調を整えながら、子どもが受け入れられや

すく安全な環境をつくるプロセスとして明らかになった。また, 保育所看護職における子どもへの健康支援・親への子育て支援の強化に向けた教育プログラムの検討の必要性が示された。

## 謝 辞

本研究にご協力頂きました保育所の施設長並びに保育所看護職の皆様にご心より深く感謝いたします。

本研究は, 2014年度聖路加国際大学大学院修士論文の一部に加筆・修正を加えたものであり, 要旨は日本小児看護学会第25回学術集会(2015年7月, 千葉市)において発表した。

なお, 利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 加藤忠明. 保育所における子供の成長発達とヘルスケア. 小児科臨床 2005; 58: 501-507.
- 2) 日本保育協会. 保育所の人的環境としての看護師等の配置. 厚生労働省の補助事業 平成21年度保育所の環境整備に関する調査研究報告書(主任研究者: 上別府圭子), 2010.
- 3) 片山美香. 幼稚園における慢性疾患患児の支援ニーズの明確化と支援モデルの構築に関する研究. 平成22年度文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書. <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19730561/>(最終参照2016/11/14)
- 4) 田中美樹. 保育所における慢性疾患を持つ子どもへの支援. 保育と保健 2013; 19: 68-72.
- 5) 出野慶子, 大木伸子, 小泉 麗, 他. 慢性疾患をもつ幼児の集団生活における支援—保育園勤務の看護師への質問紙調査より—. 小児保健研究 2007; 66: 346-351.
- 6) Perrin EC, Gerrity PS. Development of children with a chronic illness. Pediatric Clinics of North America 1984; 31: 19-31.
- 7) 浅倉次男監修. 子どもを理解する. 東京:へるす出版, 2008: 39-44.
- 8) Erikson EH, 仁科弥生訳. 幼児期と社会 1. 東京:みすず書房, 1977.
- 9) 平林優子. 慢性疾患の幼児への看護師の療養行動獲得支援に関する認識. 日本小児看護学会誌 2012; 21: 33-40.
- 10) 阿久津智恵子, 佐光恵子, 青柳千春, 他. 保育所看護職が認識している保育保健活動における役割. 日本小児看護学会誌 2013; 22: 48-55.
- 11) 阿久津智恵子, 佐光恵子, 青柳千春, 他. 保育所看護職が認識している保育保健活動における困難感. 日本小児看護学会誌 2013; 22: 56-63.
- 12) 佐藤親可. 保育所の保健活動における看護職の専門性の追求. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録 2007; 32: 231-238.
- 13) 矢野智恵, 片岡亜沙美, 山崎美恵子. 乳幼児の健康支援への保育所看護職の「思い」に関する研究. 高知学園短期大学紀要 2010; 40: 33-43.

## [Summary]

The aim of this study was to clarify the nature of interventions by nursery school nurses that allow children with chronic diseases to become familiar with nursery school life. I conducted by semi-structured interviews with 21 nurses employed at nursery schools. As a result of the qualitative analysis, three main categories were identified: interpreting the circumstances in which the child is placed, adjusting the environment of the child and people around the child, and creating an everyday environment that allows for close observation of the children. Involvement of nursery school nurses motivated children with chronic diseases and people around them, in order to create a safe environment, which can smoothly accommodate the child with chronic diseases. Going forward, further investigation of in-service educational programs for nursery school nurses to support children with chronic diseases and their parents is needed.

## [Key words]

nursery school nurse, chronic disease, child, nursery school life